

土木屋の読書と旅（15）

令和3年11月

コロナ禍という言葉が世になじみ、行動制限が緩和されつつある中で旅について考えてみたい。

* * *

そもそも旅という言葉が持つ語義、表象されるイメージとは何なのか。まず脳の活性化から始める。

▶国語辞典の説明 【旅】自宅を出て、一時他の地へ行くこと。旅行。（広辞苑＜第2版＞）

たいていの国語辞書が同様な説明をしているが、これでは表象イメージは湧かない。新明解国語辞典はさすがに違った。【たび】①判で押ししたような毎日の生活の枠からある期間離れて、ほかの土地で非日常的な生活を送り迎えること。／②さしあたっての用のために遠隔地に赴くこと。

▶旅と酒を愛した歌人若山牧水の場合 幾山河越えさり行かば寂しさの終(はて)なむ国ぞ今日も旅ゆく

友人であった詩人の萩原朔太郎が牧水の死を追悼するエッセイの中で次のように書いている。

「寂しさ」を歌っているけれど、ぼくは、「あくがれ」が牧水の基本だと思う。あくがれがあるから寂しさがある、コインの裏表みたいなものです（伊藤一彦）。

「あくがれ」は「あこがれ」の語源。在(あ)所(く)を離(か)る、「ここではない、どこかへ離れる」ということ。現在言う、「魅かれる」、「焦がれる」という意味は二番目、三番目（伊藤一彦）。

西行から山頭火までの旅は、…それは修行というか、すざまじい旅だけれども、牧水の場合はそうではなくて、現代人でもまねできるような、長くて二週間、短いと本当に二、三日、近郊を歩き回る旅だから、やろうと思えば現代人でもいくらでもできる、そういう旅の原型ですね。観光地を避けて、山をできるだけ足早で、すたすた歩く……（佐々木幸綱）。

白鳥は哀しからずや空の青海のあおにも染まずただよふ（歌集『別離』）

*以上『ぼく、牧水！』伊藤一彦（歌人）、堺 雅人（俳優）／角川 one テーマ 21 および『わたしへの旅……牧水・こころ・かたち』大岡信・伊藤一彦・佐々木幸綱ほか／増進会出版社 より要約引用

▶サントリーウィスキー＝ローヤルのテレビCM（1983年アルチュール・ランボー編）

～バックに流れる、単調で異国風の音楽。砂漠の風景の中に旅のサーカス芸人とランボーの画像

～そしてナレーションがはじまる

『 限りない無邪気さから生れた詩(うた)

世界中の詩人たちが蒼ざめたそのころ彼は砂漠の商人

永遠の詩人ランボー

あんな男ちょっといない / サントリーローヤル 』

* サントリーローヤルは四角い瓶の高級ウィスキー



昔、同時期にシルバスター・スタローンの『ランボー（米アクション映画）』が流行っていた。岩国のアケード街にあった映画館で『ランボー 怒りの脱出』をみた。大いに盛り上がった映画終了後、照明がつくと周りを屈強な外人に囲まれていた。岩国米軍基地の海兵隊員（ベトナム戦争時には岩国は海兵隊員の休養地）と思しき連中たち、筋肉の盛り上がった太い腕に海兵独特のタトゥー、自衛隊でも白兵戦では絶対に負けると確信した。閑話休題して、詩人ランボーは十代で天才詩人、あられる才能を発揮したのち、二十代は放浪そして砂漠の商人。一編の詩のような人生。

サントリーウィスキーのCMには、ちょっと哀愁、旅愁がただよう名作が多かった。青年期の私にとって、ボードレール、ランボーといったフランスの詩人には漠然とした憧れもあったが、彼らの晦渋、饒舌な表現には多少辟易するところがあり私自身は彼らの詩を一編も読んだことがない。

土木屋の読書と旅（15）

令和3年11月

* * *

晩夏、コロナ禍の中で出版された旅に関する2冊の本を読んだ。『わたしが行ったさびしい町』（2021年2月25日発行）と『旅する練習』（2021年1月12日発行）である。

▶『わたしが行ったさびしい町』松浦寿輝：詩人、小説家、東京大学名誉教授／新潮社

この本は雑誌『新潮』（2019/1~2020/8）の連載エッセーをまとめたもの。文章としては読みやすいが、内容的には多少高踏的・術学的であることや紹介される日本の町が少ないことから馴染みにくさを感じる人がいるかもしれない。奥付をみると著者は昭和29年生れ、私と同時代を生きた著者のいう「さびしい町」に表象されるものとは何だろうか。私の流儀で要点を抜粋するとこうなる。

・さびしい町というのは結局、どうということもないふつうの町のことらしいと改めて思い当たる。（「名瀬」奄美大島の章から）

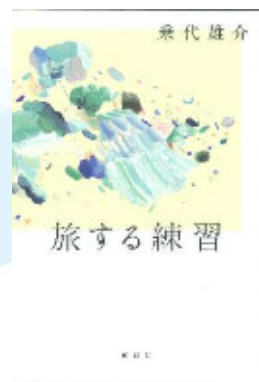
・「最高の旅とはさびしい旅にほかなるまい」と卒然と断定してしまったものだが、この命題は人目にはやや奇異なもの映ったかもしれない。さびしい気持ちになるために、ただそのためにだけに旅にでる。これは私には極めて自然な振る舞いと思われるが、それはどういうことをいざ改めて説明しようとするとうまく説明できず困る。ただそうなのだ、それでも納得できなければ西脇順三郎の詩でも読んでみたらどうか、とでも言う以外にどうやらないようだ。西脇は「さびしさ」という感情に、至純の詩の魂、至上の詩の価値を充填した詩人である。

窓に／うす明かりのつく／人の淋しき（『旅人かえらず』「二」）

・人の世の、また人の生の本質をなすのは「さびしさ」だと考えていたと思しき西脇に、私は心の底から共感する。……俗事に追いまくられるのに嫌気がさし、それから解き放たれたいと願うとき人は旅にでる。……旅は、わたし自身の、そして世界それじたいの「さびしさ」に無媒介的に向き合える得難い機会なのである。（「夢の中で行った町」の章から）

▶『旅する練習』乗代雄介：群像新人賞、野間文芸新人賞受賞／講談社

そこそこサッカーのできる塾講師で小説家の叔父と中学受験の終わった女子サッカー有望選手の姪（亜美あび）が我孫子駅（千葉県）からアントラーズの本拠地鹿嶋市まで利根川に沿って徒歩で旅をする物語である。亜美の卒業式が終わったら鹿島アントラーズのホームゲームを二人で観に行くついでに亜美が昨年行った合宿所の返し忘れた本を返すとの計画が、新型コロナウイルス感染拡大防止のため状況が一変し、全ての行事が中止となる。そこでほとんど誰もいない利根川沿いを徒歩で行く二人だけの合宿旅が始まる。叔父は人気のない風景を文章で描写する練習、亜美は利根川の堤防でドリブル、リフティングの練習。旅の2日目、途中で鹿島スタジアムまで歩いて行こうとする女子大生“みどり”と出会う。会社からの採用通知待ちの“みどり”の好きなジューコという言葉「人生には絶対に忘れてはならない二つの大切な言葉がある。それは忍耐と記憶という言葉だ。忍耐という言葉をおぼえておく必要があることさ（自伝）」、亜美が憶えた不動明王の真言、この本は主人公亜美やみどりの自己形成過程を描く抒情的な教養小説（主人公の思想の発展や人間的成長などを描いた小説）としても読める。また、国土地理院の地図を広げて小説の主人公たちが辿った行程を追っていくのも楽しい。1日の休息日を挟んで6日間の旅、行程約70kmの旅である。



土木屋の読書と旅（15）

令和3年11月

書名の『旅する練習』とは一義的には“旅をしながら練習する”ことを意味するが、“(人生の)旅をするための練習”とも読める滋味あふれる小説であると思う。



* * *

9月の休日に徒歩のひとり旅に挑戦した。いささか唐突ではあるが、松陰はどのような旅をしたのか。司馬遼太郎の『世に棲む日日（一）／文春文庫』によれば、松陰は藩外留学で「…暗いうちに提灯を掲げて城下を発った。…夕刻、四郎河原という第一目の宿泊地にたどりついたというから、四十八キロ（十二里）歩いている。はじめての旅できおい立っていたからでもあるが、この当時、東海道を旅するものは一日七里（二十八キロ）というのが常識だった…」とあり、翌日下関をめざしたが…なにしろ前日歩きすぎたため小月では歩けなくなったとある。

運動不足気味の前期高齢者である私は熟慮の上、徒歩ルートとして、萩往還は全長約53kmの街道であるが、うち1日で踏破でき、足が痛くなった時のためにバスルートが近くにある、初心者向けと思われる山口客館（駅前）～三田尻間の約20kmを選択した。唐樋札場（萩）から山口客館（駅前）の間33kmは観光協会のルートマップによれば「往還最大の難所板堂埭」や「マムシ・熊に注意」の記述があったことから（体力的にも自信がないことから）却下した。行程としては段々自宅が近くなる三田尻から山口へ向かうという危機対応上万全なルートとした。

出発点の三田尻とはどういうところか。「いま防府という市に包含されてしまった三田尻港は長州藩の第二の商港であり、三百年來の藩の水軍基地であり、その港は、港口を向島という島にふたをされ、内港は潮が淀み、磯の香りが濃い。「問屋口」といわれるあたりには、磯に沿って、回漕問屋のくろぐろとした焼板張りの大廈がならんでいる。（『世に棲む日日（四）』）」

むかし大学教養部（1、2回生）のころ人文地理学の藤岡教授の研究室へ級友と押しかけ紅茶をごちそうになったことを思い出す。先生に“君はどこの出身か”と聞かれ、“防府です”と応え、”三田尻か。問屋口があるところだね”といわれ滔々と三田尻の話をされ、その学識の深さにたじろいだ。先生は交通工学の米谷教授と親しく土木の学生はかわいがってもらった。問屋口というところは向島の対岸の海辺にあり、私の小学生時のおぼろげな記憶では駅から向島へバスで行くと三田尻を過ぎて民家がなくなる干拓地の百間土手の先、突然木造の立派な商家が並び小ぢんまりとした港町がその問屋口であり、中の関に向かう海岸沿いには幾枚もの塩田が広がっていた。

日曜日の朝、山口線で8:39大歳発、8:54新山口着経由で防府市に向かう。9時台以降夕方の通学・通勤の時間帯まで山陽本線の普通電車のダイヤが1時間に1本であることに愕然とする。見栄ではないが山口県人としてはせめて1時間に2本は欲しいと切実に思った。10時前に防府駅につき、バスで三田尻に向かう。萩往還の本来の終点は三田尻御茶屋（英雲荘）であるが、関連施設として案内のある三田尻御船倉跡をまず探す。その位置は江戸時代中期ごろから干拓が進み海沿いではないことはルートマップから分かっていたが案内板がない。不審者に間違えられないように注意して住宅地をうろつく。初っ端から迷いどんどん時間は経っていく。結局、港縁に立つ住吉神社の石造燈台から古い石積み水路を辿って発見。道路沿いではなく児童公園を挟んでその裏にあった。英雲荘（藩主の休憩など使われた公館）は子供のころからよく知った場所であるから迷わず出発点に立つが、時刻はもう10時半過ぎ。英雲荘はコロナ

土木屋の読書と旅 (15)

令和3年11月

対応のため休館、そのすぐ近くには 652 年創建といわれる三田尻の氏神様の老松神社がある。中学時代に恒例の相撲大会に出たことがあるが、近年は三田尻の「尻」にちなみ女尻相撲大会で有名になった神社である。時間を気にしながらモデルコースに沿って歩く。三田尻本町の通りで右側に懐かしい映画館「みなと劇場」の廃屋？左側に野村望東尼終焉の宅跡をみて、古い石造りの道標を右に折れて市街地を北上する。寂しすぎる天神通りアーケード街を昔の記憶と対比しながら歩き、天満宮「うめてらす」で一服。ガイドブックによれば天満宮社殿左に望東尼の歌碑*討幕軍勝利を祈った「ものの心のあだに勝坂越えつつも祈るねきこと(祈き事)うけさせたまえ」がある。9月とはいえ30℃越えの猛暑のなか社殿への階段を上る時間も気力もない。昼過ぎまでには「勝坂」を越え山口市へ入りたいと早く気持ちで旧山陽道を西に(途中一筋南の路地に“山頭火”関連の観光スポットがあるとの案内板があったが、自由律俳句は分からないのでパス)数百メートル行って北上する。佐波川越しに右田ヶ岳が見えてくる。新幹線高架隣接の剣神社を過ぎると旧道は上り坂となる。262号に並行する旧道をトンネル手前の歩道橋で西側に渡る。酷暑の中ダンプカーが木陰で昼休み休憩中。勾配は益々急になりアスファルト舗装の2車線道路が大きくカーブする右手に山越えの旧道を見つける。萩往還道である旧道が舗装された山道だとは思わなかったが途中郡境の石碑を確認して山口へ入りトンネル坑門近くの道路公園駐車場で休憩する。バス停近くの横断歩道を渡り旧道を進む。旧道は舗装された1車線道路で山裾を緩やかにアップダウンしながら蛇行する普通の田舎道である。時刻は14時を過ぎていたが、佐波川を渡って以降萩往還沿いにはコンビニはない。262号を横目に遠望しながら黙々と北上する。リョーユーパン工場の先でこの区間の沿道で唯一のコンビニに出会いむすびと麦茶を買う。山口IC近くの柗神社までは似たような風景が続くが高速道路のアンダーパスを抜けたあたりからは車の多いただの1車線道路であり萩往還の風情は全くなくなる。後は「さびしさ」に向き合える機会もなく踏破することだけを考えて16時半ごろ山口駅にたどり着いた。

* * *

読売新聞のコラム『広角多角(10月24日付)』では”時代の気分映す17文字の玉手箱“の見出しでよみうり時事川柳に触れ、「昨年2月以降は新型コロナウイルスに関する投句が圧倒的多数を占めてきた。」とし、関連数句を紹介していた。そのひとつ、「旅雑誌パンフめくってエア旅行」 古谷 健

